

5.3 憲法記念日 東京・有明防災公園、参加者の声をききました！

(20代・東京/ゆきのさん)

「ニュースを見ていて、“戦争が近づいているかも”と感じて。何かできることはないかと思い、SNSで調べてこの集会を知り、妹と来ました。今いちばん不安なのは、武器輸出が可能になったこと。日本人というだけで、戦争に加担しているような気持ちになることもあります。プラカードは、Xで公開されているデザインから、かわいいものを選びました」



(20代・東京/まりんさん)

「姉に誘われて参加しましたが、どんなことをやっているのか興味がありました。SNSで活動の様子を見て、“かっこいいな”と思ったのもきっかけです。難しく考えなくても普通に参加できる場だと感じました。若い人が参加することが大きな力になると思います」



(30代・東京/さやかさん)

「SNSで知り、初参加です。国会前のデモに参加した流れで、憲法集会のことを知ったのがきっかけ。実際に来てみると、子ども連れの方も多くて、お祭りのような雰囲気、イメージと違いました。憲法については、昔はよく分からなかったけど、最近調べるなかで、やはり変えてほしくないと思うようになりました」



(30代・東京/村田はじめさん)

「SNSで見かけたのと、最近の世の中の雰囲気もあって、近所だし、仕事も休みなんで、一度見てみようと思って。盛り上がっていて雰囲気がいいなど。ほかの集会に行ったときは、少し物々しく殺伐とした印象もあったけど、今回はピクニックのようで参加しやすいと思いました。社会的なとりくみは閉鎖的にならないようにしないといけないですね」



(40代・東京/みほさん)

「初参加です。大空こうき議員の発言を見て、“これは来なきゃいけない”と思って。思っていたよりも柔らかな雰囲気、ピクニックやフェスのような感じ。友人も来ていて、会場で知り合いに会えることも多いので、この雰囲気なら気軽に誘いやすいです」



(40代・東京/田中さん)

「パレスチナ支援のブースのお手伝いで来ています。これまでに複数回参加していますが、今年は参加者が多いですね。例年より若い世代が増えています。今の政権は、官製レイシズムのような動きもあり、



その延長線上に改憲の流れが見えていると感じます。そうした状況への危機感が、参加者の増加や若い世代の参加につながっているのかなど」

(60代・東京/おおとりさん)

「SNSを見て、“こんなのあるんだ”という軽い気持ちで来ました。想定よりずっと規模が大きくて、いろんな人が来ているなど。集会やデモの予定はSNSで知ることが多いです。自分の世代としては、憲法は“手を出してはいけないもの”という感覚。危機感があります。子どもの頃に見ていたアニメには反戦のメッセージが多くありましたし、両親も戦争を経験していて、その話をよく聞いて育ちました」



(50代・神奈川/るみこさん)

「高市政権のやり方には不安を感じていて、十分な議論もないまま改憲が進んでいるようで気になります。子どもたちの未来を簡単に変えてほしくないです。」



祖父が戦争で亡くなっていて、家族から平和の大切さを教えられてきたこともあり、“改憲”という言葉に不安を感じていました。友人を誘って来ましたが、参加者が多く、普通の人たちが集まっていると感じました」

(70代・千葉/匿名)

「どのくらい人が集まっているのか様子を見に来ました。昔若かった人たちが、そのまま年を重ねて参加しているという印象も。それぞれ考え方は違っても、“憲法を守る”とか“9条を壊さない”といった一点でまとまって集まるのは、大事なことだと思います」

(70代・千葉/中島みつこさん)

「YouTubeで9条関連の動画を見て、気になって、行ってみよう。」

ゴールデンウィークにこれだけの人が集まるのはすごいなと思います。場所も含めて、こんなに集まるんだと驚きました。もっと広がってほしい」

(20代・埼玉/吉田さん)

「職場の関係で、昨年に続いて2回目の参加です。昨年よりも人が増えている印象です。今の政権の状況を見ると危うさも感じ、自分にできることはやりたいと思っています。こうした集会はSNSでも発信されているとは思いますが、まだ広がりきっていないと感じます。職場では話題になりますが、外に出ると情報が見つげにくいとも思うので、参加した一人ひとりが発信していくことが大切だと感じます」



(10代・東京/鈴木さん)

「1年ほど前から、集会などに参加するようになりました。今回は“行かないといけない”という謎の使命感をもって。憲法集会は初めてだけど、いい雰囲気ですね。だけど同世代はあまり多くないように感じるの、若い人にどう広げていくかが大事。平和運動に対する偏見も根強くて、過去のイメージから敬遠されてしまう。そんな印象を変えるためにも、もっとラフで親しみやすい形で広げることが必要」



(70代・東京/大河内さん)

「今日は知り合いに誘われて。政権の動きを見ていると不安を感じ、日本がこれまで戦争をせず平和を保ち、発展してきたことを思うと、その流れが変わってしまうのではないかと危機感があります。憲法集会の意義は大きい。これまで多くの人が築いてきた日本の良さが損なわれてしまわないためにも」



(50代・東京/山岸つとむさん)

「国会前のデモにも参加していて、その流れで今回も。これまで積極的に参加してきたわけではないけど、市民が動くしかないという思いで。」



今の政権を支持している人が多い現状にも驚いていますし、多くの人が深く考えないまま流されているのではないかと。報道がきちんとされていないのも問題。より多くの人に知ってもらうためにも情報をしっかりと届けることが重要だと思います。危険な動きに対抗するには、こちら地道に続けていくしかなく、メディアが報道せざるを得ない状況をつくる必要がある」

(60代・東京/横山さん)

「イラク戦争の頃から、母親どうして反戦デモなどに参加してきました。安保法制の頃までは続け、その後は介護などもあり、参加できず。ただ、今の状況は放っておけないと感じていて、すぐに変えられなくても、少しでも力になればと思い参加しました。若い世代の参加も見られて、こうした動きを引き継いでいくためにも、連帯が必要だと感じています。まずは多くの人に知ってもらうことが大切」



(60代・東京/村上さん)

「国民が武力を行使する方向に変わっていくのは違うと思います。ここでは旗を持った方も多く、高齢の方が多い印象がある一方、若い人たちも別の形で集まっていると感じました。憲法9条についても、真剣に考える若い世代もいますね。自分たちの世代としての責任もありますし、これからも大切なことを伝えていかなければいけないと思っています」



(30代・東京/大空幸星先生大好きさん)

「大空こうきの発言がきっかけで来ました。彼が言っていたような状況では全くないと感じて、むしろ言いがかりのようにも思え、強い怒りを感じています。最近は市民活動を抑えようとする動きも増えていると感じていて、それを与党の議員が行っていることに強い疑問を持っています」



(埼玉/さいたま県人さん)

「少し前からデモなどに参加していて、せっかくの憲法記念日だから行こうと。参加者も多く、壮観です。老若男女問わず、憲法を守りたいと思っている人がこれだけいるんだと。訴えたいことは、今の政権に対する不満と、それを変えていきたいという思いです」



(60代後半・東京/菊地さん)

「毎回参加しています。これまでは年上の方が多い印象でしたが、今回は少し世代が下がったように感じていて、良いことだなと。集会の固い雰囲気を、少しでも和らげられればと思い、シャボン玉を持ってきました」



(40代・東京/高田さん)

「ニュースを見て、不安を感じたのがきっかけ。SNSで調べて参加するようになりました。自作ののぼりを持って、一人で来ました。集会名は堅いけど、気軽に参加できて楽しい雰囲気です。日本では政治の話は避ける空気もありますが、自分の考えを何かしらの形で伝えることが大事なので、身近なところから。のぼりはユーモアや見た目の工夫を大事にして、目に留まりやすく、興味を持ってもらう、声をかけてもらうきっかけになればいいなと」



お話を下さったみなさんはいずれも、実際に来てみると「想像以上に」参加者が多い、雰囲気が良いという感想を語っていました。そして、SNSの活用がより広く参加を呼びかけるツールとして有効であり、これまで接点のなかった層にも情報を届けることが可能となることが分かりました。

憲法集会報告（北海道・兵庫・広島）

【北海道】憲法的な価値観は揺らいでいないと確認

北海道平和運動フォーラム憲法施行79周年 STOP改憲！5・3の主催で「憲法施行79周年 STOP 改憲！5.3 憲法集会」を開催し、シンポジウムを行いました。



共同代表の池田賢太弁護士は、憲法意識に世代間ギャップがある現状を踏まえ、憲法と私たちの暮らしのつながりを説明しました。「武器輸出三原則→防衛装備移転三原則→5 類型の撤廃」は「スパイ防止法」と一連の法制度、プライバシー権をはじめ人権侵害につながると述べました。若い人も含めて、憲法的な価値観への共感は今なお揺らいでいない。その「共感」のコアにあるものを言語化し、対話と学習を進めなければならないとまとめました。

北星学園大学の岩本一郎教授は、大学生の憲法感に触れ、憲法第13条について例を挙げながら説明しました。緊急事態条項は内閣に権限を集中させ三権の均衡を崩すもの、憲法はポピュリズムの侵入を防ぐ防波堤となっているとし、国の安全が脅かされる事態になればポピュリズムの感染力は高まり、なし崩し的に戦争へと進んでしまうと警鐘を鳴らしました。

共同代表の清末愛砂室蘭工業大学教授は、憲法第24条は「軍事力への依拠」と「家父長制支配」という2つの暴力を否定していると述べました。各党の改憲案を比較し、集団的自衛権の全面的容認と憲法への自衛隊明記の問題点を明らかにしました。

参加者からは、「憲法の力を再認識できた」「憲法の理解が深まった」などの意見が寄せられ、憲法施行80周年に向け、「私たちのための憲法を守ろう！」キャラバン行動を道内で展開することを確認しました。

【兵庫】高校生平和大使から憲法アピール

5月3日、神戸みなとのもり公園で「戦争させない、9条壊すな！5・3 兵庫憲法集会」（総がかり行動兵庫主催）が、ときおり小雨が降るなか、昨年を上回る6000人の結集で開催されました。



主催者を代表してあいさつに立った羽柴修弁護士は「高市政権のもと戦争準備が進んでいる、子どもたちに平和と未来をわたそう」と訴えました。メインスピーカーの井上つぐみさん（広島・被爆体験伝承医師、第18代高校生平和大使）は、原爆で家族5人を失い原爆孤児となった川本省三さんの被爆体験、その後の結婚差別の経験、そして30歳代で自ら命を絶とうと考えたときに亡母の「諦めるな、やればで

きる」という言葉を思い出したとの証言を伝え、核兵器廃絶、戦争させないとの思いを参加者と共有しました。

憲法アピールを担当した高校生平和大使の活動に参加する市川玉稀さん（県立北条高校3年）は、「兵庫県では昨年18人が活動に参加し、広島や長崎での研修で学んだ、私たちの力は小さくても、高校生だからこそできる平和への行動を考え、声を上げます」と決意を語りました。最後にはコール・アンド・レスポンスで「高市総理は憲法守れ」「戦争反対、9条守れ」と大きく声を上げ、集会をしめくりました。

実行委員会は、今回の集会にむけ、4月10日夕刻に兵庫県内の主要駅頭56ヶ所でマイクアピールとともにチラシを配布し、集会参加を呼びかけました。

【広島】戦争のない世界に向けて飯島滋明さんから講演

戦争をさせない・9条を壊すな！ヒロシマ総がかり行動が主催する「2026 平和といのちと人権を5.3 ヒロシマ憲法集会」が5月3日、



広島県民文化センターをメイン会場に開かれました。参加者は638人でした。集会は、戦争をさせない1000人委員会から高教組の本畝朋子さんが司会を務め、オープニングとして、憲法ミュージカルの「マイライフ・マイ憲法」でスタートしました。

主催者を代表してあいさつした石口俊一さん（弁護士・ヒロシマ総がかり行動実行委員会事務局長）は、「時が来たと言って憲法改正をおっしゃっている方がいるが、何のためにどういう目的でそうなるのか。私たちはしっかり見ていきたい」と改憲論議を牽制しました。

続いて、「憲法を活かして戦争のない世界に」と題して、飯島滋明・名古屋学院大学教授が講演。飯島さんは「残念ながら日本は、どんどん戦争する国へ進んでいる」と述べ、改憲、安保3文書の改訂、軍事費の増額、非核三原則の見直し、殺傷兵器の輸出などが進む現状を取り上げました。その上で、「日本を守るというより、アメリカの軍事戦略の片棒を担いで、かつアメリカの代わりに戦うことになる。それが日本の軍事化の実態」と指摘しました。また、「憲法に自衛隊が書き込まれれば、徴兵制を実施する根拠になる」「いざとなれば反対すればいいじゃんって思うかもしれませんが、反対させないために高市さんはいろんなことをやっている」と、スパイ防止法の制定やインターネットを通じた世論操作が行われている現状に警鐘を鳴らしました。

集会の最後に、全員で「ストップ軍拡 9条を守れ！」と書かれたボードを掲げてアピールを行いました。

朝鮮学校差別反対 NGO 第3回国際連帯ハンマダン in 京都

「朝鮮学校『無償化』排除に反対する連絡会」事務局長 千地健太

4万5609筆の提出

4月24日から26日にかけて、第3回国際連帯ハンマダンが京都府で開かれました。前段の23日には東京で、「日本の子ども基本法の朝鮮学校への適用を求める世界市民署名」院内集会を行いました。「朝鮮学校と共にする国際ネットワーク」が呼びかけ、世界各国から集まった署名4万5609筆を文部科学省と子ども家庭庁に提出しました。院内集会には、アメリカ・ドイツ・韓国の仲間たちと、日本から「朝鮮学園を支援する全国ネットワーク」「朝鮮学校『無償化』排除に反対する連絡会」のメンバーが参加しました。韓国・釜山で活動している「朝鮮学校とともにする市民の会『ポム』」のハ・サンユンさん、アメリカから「ウリハッキョとともにする同胞の会」のキム・ミラさんが署名提出に際して発言しました。これに対して文科省は、「朝鮮学校は省令の要件を満たすに至らなかったため、適用されなかった」といった回答に終始しました。

その後の記者会見では、「朝鮮学校に通う子どもたちが、依然として差別されている現実は変わらない。平穏に勉強できる日がいつになったら来るのか問いたい」「植民地支配の責任を免れながら、その負担を子どもたちに転嫁させるのは正当化できない。子どもたちは保護の対象だ」などの声を訴えました。

集会後に議員会館から出ると、朝鮮学校の学生たちや保護者も参加して「朝鮮高校を『高校無償化新制度』から除外した民族差別の撤回を求める抗議行動」が降りしきる雨の中で行われていました。

京都へ移動した一行は、翌24日にフィールドワークを行いました。滋賀県にも行き、公立小学校の敷地に残る「帰国記念碑」を見て回りました。地元の在日朝鮮人の方に、滋賀では、朝鮮学校閉鎖令が出された後も公立学校内で民族教育が継続されたこと、日本人の協力があったことなどの解説を受けました。夕方は、京都市役所前に、京都のみならず、山口・北九州や大阪、愛知、広島、東京などからも朝鮮学校支援団体の仲間たちが駆けつけ、総勢200人で集会を行いました。以下は、集会での韓国人参加者の発言です。

「政治は教室の敷居をまたぐべきではありません」「子どもたちの学び舎に差別の壁を持ち込むことは、国際社会が認める民主主義の価値を捨てるに等しい行為です」「差別の暴風雨が吹き荒れても、私たちが一緒に傘を差します。今日、私たちの連帯が京都を越えて日本全域に、そして世界に広がり、朝鮮学校の運動場に子どもたちの笑い声が響き渡るその日まで、最後まで一緒にともに歩みます」「朝鮮学校は私たちの希望です！差別をやめて教育権を保障しよう！」

集会の後は、四条通りや祇園を通過して円山公園までデモ行進し、朝鮮学校差別反対を訴えました。

民族教育に関して12本の発言

25日は、同志社大学を会場に学術文化企画が催されました。学術研究会では、「民族教育の場をつくる」「学びを支える」「朝鮮学校とアイデンティティ」の3つの分科会で12本の実践面と理論面の報告を受けました。「朝鮮学校差別／支援の歴史と現状、課題と展望」と題したシンポジウムでは、一橋大学名誉教授の田中宏さん、鳥取大学教員の呉永鎬（オ・ヨンホ）さん、弁護士の具良鉦（ク・リャンオク）さん、朝鮮学校保護者の朴錦淑（パク・クムスク）さんが登壇しました。

続いて文化公演「ソンチャバボジャ！（手をつないでみよう！）」では、シンガーソングライターの宋知香（ソン・チヒャン）さんによる歌、文芸同京都・舞踊部と声楽部の舞踊と歌、滋賀歌話団のコーラスが披露されました。日本各地の朝鮮学校支援団体や海外ゲストも登壇し、活動の紹介と連帯のアピールが続きました。最後は、全出演者と参加者で輪になり、「バスに乗って電車に乗って」「手をつないでみよう」を合唱しました。

最終日は、「朝鮮学校と共にする国際ネットワーク」の会議を行い、2027年のハンマダンを北九州市などで開催することが決まりました。韓国からの参加者の「日本は闘争の現場だ」という発言があり、現場に足を運ぶ意義を確認しました。

第3回国際連帯ハンマダンには、のべ600人以上が参加しました。大規模な行事を企画、準備した「朝鮮学校と民族教育の発展をめざす会・京滋（こっぼんおり）」のみなさまに感謝を申し上げます。「世界市民署名」に協力いただき、朝鮮学校差別反対の声を寄せてくださったみなさまにもお礼申し上げます。

国境を越えた連帯は大きな力となります。朝鮮学校差別撤廃を実現すべく、引き続きとりくみを進めましょう。
(ちじけんた)



参加者一同で記念写真
(提供：こっぼんおり)

2026NPT 再検討会議 参加報告

高校生平和大使などとともに原水禁が核廃絶を訴える

谷 雅志 (原水爆禁止日本国民会議 事務局長)

核不拡散条約 (NPT) 再検討会議が 4 月 27 日から 5 月 22 日にかけて、アメリカ・ニューヨークにある国連本部で開催されています。過去 2 回の NPT 再検討会議では最終文書の合意ができず、国際情勢の混迷度合いを色濃く反映する結果となっています。第 11 回目となる今回は、核兵器廃絶・核軍縮に向けた最終文書の合意に至るのかが注目されています。一定の成果を示せなかった場合、NPT 体制への信頼が揺らぎ、実質的に空洞化してしまう事態が危惧されています。本誌がみなさんのお手元に届くころには会議は終了しています。こういった結果になるのか、現在は固唾をのんで見守っているところです。

今回、原水爆禁止日本国民会議 (原水禁) はニューヨークへ 26 人の代表団を派遣し、NPT 再検討会議に対して核軍縮に向けた具体的な行動を求めるなどの意見発信を追求するとともに、サイドイベントなどを通して、核廃絶を求め行動する人びとと交流を行いました。今回は日本から代表団を派遣した日本原水爆被害者団体協議会 (日本被団協)・原水爆禁止日本協議会 (日本原水協)・日本生活協同組合連合会 (日本生協連) と事前の情報交換や共同企画を相談することで、それぞれの発信力を高められるようとりくみました。(写真 1)

原水禁の代表団には情報産業労働組合連合会 (情報労連) から 5 人が参加し、共同行動にとりくむ機会ともなりました。



NPT 再検討会議をきっかけに連携の可能性を高めることができたと考えています。他にも原水禁の代表団には、全国被爆二世団体連絡協議会 (全国被爆二世協) の 2 人、高校生平和大使の 3 人、高校生平和大使 OP (Old Person) で通訳担当の大学生 2 人、秋葉忠利さん (前広島市長・原水禁顧問)、川副忠子さん (長崎原水禁・被爆連) など多様なメンバーが参加しました。現地での活動日誌やマスコミ報道については、原水禁ホームページに掲載しています。ぜひご覧ください。ここではいくつか特徴的な場面に絞って報告します。

【NPT 再検討会議初日】

初日から、懸念された通り各国の主張が真っ向からぶつかり合う場面がありました。NPO 席で会議の様子を傍聴していた私たちにもその緊張感が伝わる

やりとりだったように感じます。

それぞれの発言の要点は以下の通りです。

- アントニオ・グテーレス事務総長のスピーチ
 - ・今こそ真の平和への唯一の道である軍縮と核不拡散のとりくみを改めて誓うべき
 - ・核不拡散条約について遅滞なく遵守の責任あり
 - ・日本被団協のノーベル平和賞に言及
- アメリカ代表の発言
 - ・イランが副議長 26 カ国の中に入っていることに異議
 - ・イランが IAEA (国際原子力機関) の査察を受け入れない等、NPT 違反であることを指摘
 - ・アメリカはイランが核不拡散のリーダー的ポジションを担うことに同意していない
- オーストラリア代表の発言
 - ・アメリカの発言を支持
- イラン代表の発言
 - ・会議の冒頭からアメリカが政治的発言をしたことを批判
 - ・アメリカによるイスラエルの核兵器開発支援を批判
 - ・アメリカとオーストラリアが、それぞれ NPT 再検討会議の中で選出される役割には同意できない
- イギリス代表の発言
 - ・イラン代表の発言に異議と懸念を記録に残すことを要求
- アラブ首長国連邦 (UAE) 代表の発言
 - ・イランの副議長選出反対し強い懸念を示す
 - ・イランの行動は核不拡散に反しており、副議長選出は NPT 再検討会議の信頼を損なう
- ロシア代表の発言
 - ・アメリカ、イギリス、アラブ首長国連邦、オーストラリアが述べた内容は受け入れられない
 - ・上記の各国発言について遺憾の意を表明
 - ・一般討論でこれらの意見に各国が態度を表明することを求める
 - ・政治的攻撃が成果に影響をない与えないことを願う
- アメリカから NPT 再検討会議の分担金に関する発言
 - ・核兵器保有 5 か国の負担据え置きのまま
 - ・アメリカは会議全体の 32% 超の負担
 - ・中国は驚異的な経済成長にもかかわらず 0.91% の負担に留まっている
 - ・現状維持は受け入れられない
 - ・見直し再調整を提案
- 中国代表の発言
 - ・アメリカは協議せずに分担金調整をもちかけてきた
 - ・中国代表団は本国からの指示を仰ぐ必要がある
 - ・この問題の協議はより多くの時間をかけて行う必要がある
 - ・アメリカは今回の費用を速やかに支払うべき

○ロシア代表の発言

- ・中国が提案した時間をとって協議することを支持
《議長の判断》
- ・現時点で合意を得ることは不可能
- ・この議題の延期を提案 → 異論なく決定

アメリカ・トランプ大統領が国際法を軽視し、国連への拠出金を絞っていると報道されています。NPT体制についてもアメリカが離脱を言い出すのではないかと危惧されています。P5と呼ばれる核兵器保有国の対立構造（アメリカ・イギリス・フランスとロシア・中国）の下で核軍縮がストップするどころか、核拡散につながりかねないという危機感が高まっています。アメリカとロシアの間での新戦略兵器削減条約（新START）が今年2月に失効したこともあり、核軍縮の流れが見通せなくなっています。こういった状況とこの冒頭のやりとりをリンクさせて考えると、最終文書の合意にむけた課題が山積する難しい状況が改めて明らかになりました。

【サイドイベント「核被害者の権利の確立：若い世代の役割」】

NPT再検討会議が開かれている期間に団体登録をしたうえで会議室利用を申し込むと、国連本部ビル内の会議室を借りてサイドイベントを開催できます。会議室は40人ほどでいっぱいになってしまう大きさですが、サイドイベントの日程は公開されているため、興味関心をもって話を聞きに来る参加者もいます。

原水禁は「核の無い世界のためのマンハッタンプロジェクト」と共催でサイドイベントを実施しました（写真2・3）。



はじめに被爆者の川副さんが英語で自身と家族が経験した被爆の実相について語りました。被爆後の長崎がどういった光景であ



ったかを記録に残されていたご家族の話をもとに証言した言葉は、何よりも強い力を帯びて参加者に届いていたように感じます。川副さんは必ず「このようにことを二度と繰り返さないためにも、核兵器は廃絶するしかない」という明確なおもいを語ります。被爆者のおもいに応えることができている現状を認めつつも、あきらめることなくとりくむエネルギーを得ることができました。次に全国被爆二世協の崎山さんと上野さんから、被爆者援護法の適用外に置かれている被爆二世が直面させられてきた健康不安などの課題について報告を受けました。続いて高校生平和大使の3人が、被爆の実相の継承にと

りくんでいること、核兵器廃絶と世界平和の実現に向け街頭になって署名を集めている様子をスピーチしました。最後に「核の無い世界のためのマンハッタンプロジェクト」の井上まりさんが、団体としてとりくんでいる世界のヒバクシャ救済について紹介しました。

りくんでいること、核兵器廃絶と世界平和の実現に向け街頭になって署名を集めている様子をスピーチしました。最後に「核の無い世界のためのマンハッタンプロジェクト」の井上まりさんが、団体としてとりくんでいる世界のヒバクシャ救済について紹介しました。

参加者からは、被爆の影響がどこまであるのか科学的な検証を国際的に進めなくてはならないといった発言や、日本国内で被爆者への補償がどう捉えられているのかといった質問がありました。秋葉さんから、「被爆者援護法」をめぐる日本政府の姿勢と、核兵器廃絶に向けた運動の展望について説明をいただきました。若い世代が活躍している様子について「Wonderful!」と評価してくださる参加者もあり、私たちのとりくみの方向性の正しさを確認しつつ、原爆投下から81年を迎えようとする今、具体的な「継承」というテーマがより重みを増していることを改めて痛感しました。このサイドイベントでは参加者からの質問や意見が多数出ました。大学生の勝川さんと牟田さんが協力して英語と日本語の通訳を担当してくれました。本会議傍聴時にも同時通訳で討論の要点を明確に伝えてくれた2人には負担をかけてしまいましたが、本当に助けられました。

【ニューヨーク市立大学でのイベント】

川副さんと、長崎と広島から参加した高校生平和大使の3人が、ニューヨーク市立大学で学生など約70人の参加者に向けてスピーチを行いました。高校生平和大使・長崎の才津さんが被爆体験を語りながらなかった曾祖父について、「多くの被爆者はつらい記憶を思い出したがらなかったが、それでもその記憶とともに毎日を生きていた」と語りました。続いて、高校生平和大使・広島の寺本さんが『もう二度と被爆者を生まないでほしい』と被爆者の方がいつも話していることを伝えたいと訴えました。最後に高校生平和大使・広島の下田さんが、これまで続けてきた署名活動に込められた核兵器廃絶への決意を話し、「私たちは『微力だけど無力ではない』』と結びました。川副さんを含めて全員が英語でスピーチし、おもいを懸命に伝えようとする姿に、参加者は引き込まれるような様子で話を聞いていたように感じています（写真4）。

参加者からは「若者が変化の出発点になるのだと改めて感じさせられた。彼らの姿に大きな刺激を受けた」といった発言がありました。ニューヨークの街中では「NPT再検討会議が開催されている」ことが広く認識されているわけではありません。会議室の中だけでなくその外でも、どれだけ交流の機会を作れるのかを考えさせられました。（たに まさし）



〔本の紹介〕

『シン・ケンポウ やさしく学ぶ日本国憲法』
清水雅彦／著 イラスト・あべのりこ
株式会社同時代社 2026年5月15日発行

とにかく読みやすい！ イラスト、文章のわかりやすさ、文字数。その名の通り「やさしく学ぶ」ことができます。見開き左右ページで1つずつテーマが完結していきます。気がつくと思ったらという間にページが進んでいます。

清水さんが、本書の「4 私は『改憲派』ですが」に、「私は政治的には保守の側ではなく左翼・リベラルの側ですが、『改憲派』ですから」と記しています。私はこの一文に強く共感します。詳しくは実際にここを読んでいただきたいです。端的に説明することを心がけながら、「憲法理念の実現をめざすことこそが重要」と主張すると、「改憲派」か「護憲派」か、という問いを投げ返されることが珍しくありません。憲法をこの「わかりやすい構図」でのみ考えることへの違和感を、私はずっと持ち続けています。二極化した考え方はどうしても極端な主張に陥ってしまい、対立の構図にしかならないことが危惧されるからです。「憲法理念の実現をめざす」ことは、一見するとわかりにくい主張かもしれませんが、この本を読みながらやはり問

違ってないのだというおもいを強くすることができました。

高市首相が、ここ一年のうちに改憲発議の目途を立てる、といったことを発言しています。「時は来ました」と。一方で、5月3日を中心に報道各社から公表された世論調査によると、いずれも「憲法改正」が優先課題とは言えないといった結果が明らかになっています。一体、何の時が来たのでしょうか。前文に「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とあるように、国際情勢が混迷度を増す今こそ、その「決意」を示すべきではありませんか。

清水さんが普段から語っている話が詰まった本書を、ぜひご活用いただければと思います。「分かりやすさ」が求められるのは主張や理念ではなく、表現というところなのだと言感させられる一冊です。さて、この本の紹介はわかりやすい表現となっているだろうか…と自問自答です。

シン・ケンポウ

やさしく学ぶ日本国憲法

清水雅彦／著
イラスト・あべのりこ



国家？ 国民？ 人権？
天皇制？ 「改憲」？ 「護憲」？
新しい憲法草案をまねに、まさかご先生が50のキモンに答えます！
私たちの未来のために、
いまこそ憲法をマスターしよう！

ひやくせつぷとう 百折不撓

最西端の島・与那国で 地方自治を考える

日本最西端の島、与那国島から台湾本島は距離にして約111km。条件が良い日には台湾の山並みや街灯りが見えることもあるそうですが、生憎この日は朝から小雨が降り続き、台湾の方向に目を凝らしても山並みを確認することは出来ませんでした。

平和フォーラムの当面するとりくみとして、中央加盟団体や地方運動組織の全国ブロックごとに、基地問題を考える平和集会の実施をお願いしています。6月から7月にかけての集会実施に向けた準備が進められていることに紙面を借りて感謝を申し上げます。

与那国島を訪れたのは、各ブロック集会の冒頭で視聴いただく動画撮影のためです。与那国島の他にも長射程ミサイルが配備された熊本・健軍駐屯地、オスプレイが配備された陸自佐賀駐屯地と、防衛ジャーナリストの半田滋さんやアワープラネットTVの協力のもと、強行日程ながら精力的に撮影が進められました。

なし崩し的に基地機能の強化が進められる与那国島の人口は2026年4月時点で1,652人。うち自衛隊員は約240人です。2026年度中に配備予定の対空電子戦部隊や2030年度が想定されている中距離

地对空誘導弾部隊が配備されると約370人に増え、島の人口の約2割を占めることになります。与那国の皆さんへの取材で印象に残ったのは、急速な防衛力強化や日米軍事同盟の一体化をどこまで受け入れればいいのかという疑問と、外交による解決を求める切実な声です。島に移住してカフェを経営する猪俣哲さんは、「この島には人を惹きつける魅力がある」と言います。「たくさんの方が軍拡の最前線にある与那国島に関心を寄せてもらえれば、紛争の島ではなくて交流のハブになれるはず。交流の最前線の機能を備えた島であることのポテンシャルを見逃してはならないと思います」と語っていました。

政府は、中国の軍拡をにらんで防衛費を大幅に増やし、防衛力の南西シフトを急速に進めています。しかし、そこに住む人々の理解もないままに進める防衛力の強化は、地方自治の破壊以外の何物でもありません。毀損された地方自治や平和主義をどうやって取り戻すか、ブロックごとの平和集会を通じて日本の平和、法治主義、および地方自治の本来のあり方に対する真剣な議論につなげたいと考えています。

軍事力だけで与那国島や日本の平和を語るのは大きな間違いです。軍事力に左右されない安定要因をつくること、周辺地域との友好的なつながりを強める努力こそが不可欠なのだと言感しました。晴れ渡る青空の下で、東アジアの文化・交流の拠点としての与那国島を訪れる日が必ず来ることを信じて、とりくみを進めることを胸に誓いました。
(染 裕之)